

史
料
編

岩田家文書（小鹿野町加藤録郎氏所藏）

史料一

〔寛永二十一年七月 連雀宿出入につき岩田忠左衛門訴状〕

乍恐以書付を申上候事

一、小鹿野町之市巷々月二五度つ立申候が、拙者親才覚を以て六度之市二相定候故、代々連雀之宿拙者仕候所、同町之四郎右衛門連雀之宿可致由御手代江申上候得者、五郎兵衛殿前々を御存知之通被仰付候得、五郎兵衛殿江四郎右衛門恨を申、却而五郎兵衛殿江御こうはんを付申、今五郎兵衛殿御ためを被存、高山村左近、鬼石町衆、出生村忠左衛門、小森村七郎兵衛被申候、手様ハ午ノ十月未ノ極月迄四郎右衛門二連雀之宿致させ申、正月の拙者所江帰し被申候筈二扱被申候、其上五郎兵衛殿親子三人之衆被仰様二、此義以来六ヶ敷成候得者御申分被成可被下由御定候間、不及是非四郎右衛門方の手形を取相済申候

一、当正月商人返シ候間、右之手形返シ候得、四郎右衛門申二付而右扱之通相違有間敷と存手形返シ候得者、商人老人二次之市の拙者所江越不申四郎右衛門宿仕候、自然商人宿拙者所江帰り申間敷と申候者、四郎右衛門二宿致させ間敷定御座候得共用不申やと仕候

一、金兵衛様御代官之時、小鹿野惣町人御手代衆江申上候、万商売物之座定り市わり御座候が、右四郎右衛門所へ、塩あい物四間、之内二定申候、此証文名主二而御座候間、先四郎右衛門二惣町人預ヶ置申候間四郎右衛門連雀之宿致申候筋目二而御座有間敷候

一、太左衛門・宋兵衛と申連雀拙者所江参間敷と申二付而、小鹿野大宮衆連雀の方へ意見被申候所をは、四郎右衛門意見衆所へ参候而、此意見御無用之由申候而をさへ申候

一、右之太左衛門・惣兵衛と申商人拙者所へ参間敷と申候様子、若鬼石二而扱之時我等二相談不致済シ候と有、拙者所へ参間敷と申候、拙者商人衆と相談申候様子口上二而可申上候、是非太左衛門・惣兵衛二申分御座候間御

召出可被下候事

右之条々四郎右衛門・大宮町多左衛門・惣兵衛被召出様子御尋被仰付所仰候、仍如件

寛永式拾老年

申七月八日

小鹿野町 忠左衛門

御代官様

右之通目安上候間返答書致対決可被申候、以上

申七月八日

大 与三衛門

小鹿野町 四郎右衛門

大宮町 多左衛門

惣兵衛

参

史料二

〔承応三年九月 薄村薬師堂より小鹿野町へ市取立につき一札〕

（表紙）

小鹿野市立之書付
薄村薬師堂より市当所へ引候書紙

一札之事

一、薄村前々より立来申候市之儀、此度貴殿小鹿野江御引被成候所、村中之者迷惑之由彼此申候所、段々世話人立入相済申候、然ル上はわずかにても滞り申者決而無御座候、為念仍如件

承応三年九月晦日

中薄 小兵衛 印

小森 茂左衛門 印

忠兵衛殿

此度小鹿野に晦日市たて申に付^而、拙者不届にて薄衆^は内所不申とて、薄衆御断に候、乍去、我等は此市我等たいしやうにてはたて不申候、小かの衆市たて之由被仰候間、そのなみに成候ては申候、其に付^而、以来やくしとう町にても、其外あきないたさせましき之由被仰候間、尤任ましく候、仍如件

九月晦日

忠兵衛 印

(承応三年カ)

中薄 小兵衛 殿

其外御町衆

小森 茂左衛門 殿

(以下二点略)

史料三

(天和三年正月 薬師堂村年貢金借用証文)

手形之事

一、戌之御年貢未進金上納仕儀不罷成候^一付、貴殿へ御無心申金子拾六両三分借用申所実正也、右之金子来ル七月廿五日^二急度相済^シ可申候、少モチ、申間敷候、為後日如此手形、仍如件

天和三年

薬師堂村 名主 忠次郎 印

亥ノ正月十七日

左百姓同所 市兵衛 印

同断 弥兵衛 印

同断 平右衛門 印

同断 与五兵衛 印

小鹿野町
喜左衛門 殿 旨

史料四

(元禄十四年八月 上薄村夏成御年貢金請取証文)

巳畑方夏成御年貢金請取之事

一、金九拾八両也

内拾七両小判

右八当巳夏成御年貢金請取申所実正也、重^而御手代様方御手形^二引替可申候、為後日、仍如件

元禄拾四年巳八月六日

上薄村 名主 新六郎 殿

岩田弥五左衛門 印

史料五

(元禄十四年八月 中薄村夏成御年貢金請取証文)

巳畑方夏成御年貢金請取之事

一、金三拾五両三分也

内七両小判

右八当巳夏成御年貢金請取申所実正也、重^而御手代様方御手形^二引替可申候、為後日、仍如件

元禄拾四年巳八月六日

中薄村 名主 又八郎 殿

岩田弥五左衛門 印

史料六

(元禄十四年八月 下薄村夏成御年貢金請取証文)

巳畑方夏成御年貢金請取之事

一、金四拾両式分也

内拾式両小判

右八当巳夏成御年貢金請取申所実正也、重^而御手代様方御手形^二引替可申

候、為後日、仍如件

元禄拾四年巳八月六日

岩田弥五左衛門 印

下薄村 名主 三左衛門殿

史料七

〔元禄十四年十二月 薄村年貢皆済金請取証文〕

巳御年貢皆済金請取之事

一、金七拾兩貳分ト永貳百三拾文三分

皆済金

一、金貳兩三分ト永四拾文七分

御藏前御用金

一、金三分ト永百四拾九文三分

歩銀

三口合金七拾四兩壹分ト永百七拾文三分

右ハ当巳御年貢皆済金請取申所実正也、重而御手代様皆済目録と引替可申候、為後日、仍如件

元禄十四年巳十二月十九日

岩田弥五左衛門 印

薄村 名主 新六郎殿

〃 又八郎殿

〃 忠次郎殿

〃 三左衛門殿

史料八

〔安永三年十一月 出店ならびに金子預かりにつき一札〕

一札之事

一、御當地江 出店御座候所出店 并ニ金子共ニ預り申所実正也、但シ金子之儀は九拾八兩貳朱錢四百文預り申候、右金高之内ニて式捨九兩貳朱所々江 拂方ニ可仕候、又三捨兩は私請取候筈之金子ニ御座候、差引残テ金三捨九

兩錢四百文貫殿方より遣ニ預リ置申候、然上は御公儀様御法度之儀は不及申ニ貞実ニ可仕候、此上何によらず私子共片付候とも私一分ノ了簡ニは仕間敷候、貴殿御差圖ヲ請其上万事可仕候、為後日一札仍如件

安永三年

午十一月

吉五郎殿

預り主 八右衛門 印
證人 権兵衛 印
彦兵衛 印
源兵衛 印

史料九

〔天保六年三月 酒造商売につき屋敷年季貸証文〕

一札之事

一、我等酒造株所持致候所、貫殿酒造被成度由当邑組頭伝右衛門殿御世話ニ而、我等屋敷内ニ而御商売可被成候、且年季之義者拾ヶ年ニ相定メ、又候五ヶ年者無賃ニ而酒造可被成候筈相定申候、然上ハ年季中御勝手ニ御支配可被成候、為念一札、仍如件

天保六年未三月

武州秩父郡 上小鹿野村

長喜左衛門

同郡同所

証人組頭 伝右衛門

越前国今立郡市野々邑

奥右衛門殿

史料十

〔年不詳 小鹿野由緒書〕

小鹿野村一村ハ上ハ下飯田村境下は下吉田村さかい、卷村ニ而千三百石余、

松平因幡守様御加増にて上下郷と相成ル、此時市場町場親郷見、一村一ヶ寺、致与申、勝円寺下郷、分、差出入、且家有之寺十輪寺斗成、境、字高田未堀、引小判沢出口もみその木、引境なり、上、字新井塚なり、寛永四年丁卯二月鎮守なきとて大久保、有之処、諏訪明神上ノ森、引鎮守奉る也

又慶安五壬辰二月下郷字泉田原より塚ノ上、立来り候小鹿野明神上郷、引、御繩ノ時節、引故除地ハ無之候故、両社奉鎮守と也

是迄御除地御繩三度程有之候得とも、慶安五壬辰ノ五月中、御除地之御触有之、夫々役割、御檢地御役人様石川平兵衛様・永田甚五左衛門様・吉田又兵衛様・持田伊兵衛様・大嶋弥兵衛様・田村佐五右衛門様・河野利兵衛様・大河内与兵衛様右御八人御出役被遊候節ハ、御宿御会所岩田忠左衛門宅、御繩ハ年配之方六人見立御案内者田端内膳・出浦太郎右衛門・横田太郎左衛門・吉田左馬助・山田市左衛門・新井甚右衛門・小鹿野村御水帳三拾五帖上郷之分拾二冊、慶安五壬辰年六月十日始々同九月迄御檢地相濟

小鹿野村、天正年中頃林新左衛門と申者有、長立大家、著つり鶴を打喰之露頭、および従御公儀様御科、あつかり、当人、御仕置十類たやすと被仰家、けつ所、相成也、御取上、相成人札となり、上吉田村小河、居住左馬助入札、おと、右新左衛門跡取出居住、相成、夫、吉田左馬助ハ上吉田村今の浪人、岩田忠兵衛者薄村薬師堂、居住、寺、宝養寺、屋敷跡居住之節より殿ヶ谷戸字、申なり、屋敷崎ヲ並木と云岩田居住之時、並木有之、是より字並木と成ル、此先ヲ鳥居云岩田居住故、右之字乃なり、岩田氏之祖神氏神、祭、丹生明神なり、屋敷先、丹生明神祭置也、小鹿野町場、相成、二付大河内金兵衛様より屋敷拝料、而、薬師堂今の浪人小鹿野村、越候

此時薄村薬師堂今市持参致なり、小鹿野へ市引成り、此時程立テ承応二癸巳六月市神として天王の社町中、祭、岩田達之社人字越根関口河内祖今、おゐて岩田、祭日、二届ケ、いたし、六月十五日祭、成り、六月十五日、時、二より農業さハリ、二付八月十五日引、明和二己酉年也、其後六月十五日、

八月十五日岩田、社人届ケ、ナリ、小鹿野村鎮守小鹿野大明神、諏訪大明神、神、社、祭日、二月廿七日、七月廿七日なり、二月ハ諏訪明神今小鹿野明神、御輿渡、二月廿七日午、上刻、ミコシ渡、ナリ、七月廿七日、小鹿野明神今諏訪明神、御輿渡ルナリ、同廿七日午の上刻、渡、諏訪明神大久保始メ祭故、今、祭礼日、上下、神ヲ持御輿先、立、二月廿七日祭礼、定日字、中嶋河原人、内兩人宛木綿袴大小帯刀、二竹つへ持、悪間、私として先達節、時、名主并、岩田、立寄一札有テ通、なり、是古礼なり

出浦祖太郎右衛門、薄村字、あ、ふ部居住小鹿野村、出、あ、あ、ふ部分の浪人也、下町、市頭、連雀見世なり、中町、連雀見世吉田左馬助之所也、上町、連雀見世岩田忠兵衛の所也、横田太郎左衛門祖、上吉田村字田中居住浪人ナリ、小鹿野村出

山田市左衛門、下小鹿野字竹ノ内今上小鹿野村、出、下小鹿野屋敷跡市左衛門名繩受なり、田嶋四郎右衛門祖、是、小鹿野村、内字新井、出、ナリ、田嶋祖病死、た、候所大久保將監親類なり、新井田嶋祖親類、田嶋・大久保、家は、あい、相成、出訴出入、相成世話人立入取扱、新井田嶋二男・大久保二女双方合、守屋さつま跡敷相立候筈、名字、新井田嶋方合持参、紋、大久保方より持参、下り藤ノ丸持参、中寄相統致、内濟致候、夫、田嶋、藤ノ丸、紋也、字新井田嶋一統、鉄砲角、三ツ柏ナリ、天明年中之頃新田浪人とて丸ノ内中黒、付也、本紋、つほう角、三ツ柏なり、後、出入以後藤、丸引替中くろトナル、天明年中頃なり

小鹿野町、吉田・岩田・横田・出浦・山田・田嶋右六名と云なり
小鹿野村、古キ、林新左衛門・吉田大藏と云者有、右、新左衛門、鶴コロシ故、けつ志、十類けずられ候と云、吉田大藏、大日向山大養寺、浪人、江、手紙付遣候時、右、老人大養寺住僧ころし、金子取逃跡吟味、相成、小鹿野大藏と申手紙出候、二付、召捕、成、入牢罷成御仕置相成家、た、ん、せ、つ、となる、

次、田端内膳と云人有、是、相成之百姓と相見、候得共、林新左衛門之聲

故けつしよ二成、御檢地御案内甚右衛門ハ字新井居住、子孫たいはだんせつと成

十輪寺ハ昔者十輪坊と云志ゆげんなり、後に十輪寺と云寺相成、小鹿野字別所なり、今地引、此地ハ古寺地と見へて町並無所はか所なり、町並相成付奥無所引、跡方日堂立、十輪寺仁王字別所引也、今田ノ端ニ杉ノ木二本有、此所仁王門有除地有り、慶安五壬辰年御檢地御役人此地ハと御聞有之時、案内之者此地ハ御仁王様ノ分被申上候時、御役人衆其言葉聞帳面鬼王面とて八畝歩御檢地有、鬼王ト書有故十王面と得心ルハ非なり

十輪寺元文二年二月十一日焼失して後建立なり、ため馬引出さわぎ候とて馬士口くわへ候き、昔ハ右衛門家へ一寸さしそれより出と相成此時地内立木切り取材木と申所岩田金子百両木代差出立木被立置ルなり、十輪寺御除地三拾八間三拾間屋敷三反八畝歩なり

小鹿野、町中境は御判行高札今天王宮引境なり、天王宮分十輪寺門前境内上ハはしの家也、家雨落より糸ツリなり是さかへなり、町並大立候通道ハ、下ハ新井屋式軒之間勝円寺通道なり、中ハ山田・橋本之間がにあら江大通、中上町之死馬捨通もとうるなり、下町ハ小判沢出口上死馬捨有、大上町新井越ノ根ハ字落合河原死馬捨場あり、岩田大木の問越ノ根今通也、字田端々町横通シ川原江道ハ十輪寺上ノ方道町横通ル成リ、向山馬草場へ行道なり

十輪寺本尊三尊ハ岩田等納メルナリ、万日堂本尊三尊ハ吉田等納メルナリ、常木山十輪寺且頭と申者ハ岩田氏・吉田氏ナリ、岩田は左座也吉田は右座也、居士大姉号ハ左右斗リ、十輪寺ハ不孝之節寺之時御札居士号金卷両也、信士号金式分也、野布施ハ居士号鳥銅卷貫文、信士号同五百文なり、岩田、薄村薬師堂今小鹿野出候時召連候家旅共近所取立置候者名字無之付、薄村之内字遠藤ニ差置候ニ付右之遠藤を取、遠藤と可付クと岩田相申付遠藤也、大木は薬師尊前二沢有其人樫大木有、其本家有テ夫より小鹿野へ召連られ其方者大木近所より出候故、大木と可付

と申付夫今名字大木申也、宅人は十輪寺大門先差置申候

一、小鹿野町場 相成、御公儀様より御陣屋御取立被遊、下町はづれ南裏三拾八間四方 御取立有之候、其後町中程御引被遊北町裏四拾間四方御取立被遊候、其後享保年中御引私と相成

一、鷹巣田より上ノ道の作場道なり、往来と申者不有、伊豆沢村往來ハ上町はつれ今入口也、鷹巣田道町抜キ堀道也、是ハ上町裏出水之節水はき也、又十輪寺裏畝ぐら田端境土手石塚ハ町水よけ也、私取べからず土手添道を下ノ大堀抜ケルなり

小鹿野村は東ハあかひら川を下引吉田村境迄、南は向山不動瀧下くへを引川迄境也、西ハ下飯田村畑くろ境なり、北ハ山おね境しまた峠道有吉田道ある、此上宅本杉峠赤柴通道有

田島家文書（小鹿野町田隣健一氏所蔵）

史料十一

〔元和元年十一月 小鹿野郷年貢割付状〕

卯年小鹿野郷御年貢可納割付之事

一、永式百拾四貫三百六拾八文

高辻

此内

壹貫貳百文

寅之川かけ引

百六拾五文

御藏屋しき引

拾六貫八百九拾文

田方損引

四拾五貫貳百五拾七文

損免三ツ引

残百五拾貫八百五拾六文

卯納

右如此相定候上者、霜月中急度可有皆済候、若其通於無沙汰者謹責を以可申付者也、仍如件

元和元年

卯霜月十一日

富田吉右衛門 (花押)
大河内孫十 (花押)

名主
百姓中

史料十二

〔寛永十一年十一月 小鹿野郷年貢割付状〕

戌歳小鹿野郷御年貢可納割付之事

一、永式百拾四貫三百六拾八文

高辻

内

百六拾五文

壹貫文

七拾五文

七貫五百文

拾五貫貳百卅貳文

残百九拾貫三百九拾六文

戌之納

右如此相定上者、霜月廿日を切而急度可致皆済、若其通於無沙汰者謹責を

以可申付者也、仍如件

寛永拾老年戌霜月十五日

大金兵 印

伊半十 印

名主百姓中旨

史料十三

〔寛永十九年十二月 小鹿野村年貢請取状〕

午ノ歳小鹿野村御年貢請取事

一、永式貫三百四拾五文

綿本代^二而納

一、永壹貫百四拾四文

漆^二て納

此漆壹貫六百廿五匁

一、永四百年

荏^二て納

此荏貳石也

一、永百四拾貳貫三百八拾壹文

金^二て納

合百四拾六貫貳百七拾文

外浮役臨時物

一、永四拾三文

絹の割

一、永五百六拾三文

紙の割

一、永壹貫四百五拾三文

綿のわり

一、永壹貫五百九文

役綿ノ本

一、永九百三拾六文

右之割

一、永壹貫三百五拾文

紙舟役本

一、永貳百七拾文

右之わり

合六貫百貳拾四文

二口納合百五拾貳貫三百九拾四文

此外口錢済

右請取処皆済也、仍如件

寛永拾九年午極月廿日

大与兵 印

名主百姓中

史料十四

〔元禄十一年八月 酒造御運上覚〕

覚

高銀壹貫八匁之運上

一、銀五百四匁

丑之酒造御運上

此永八貫四百文

歩銀永拾四文

永合八貫四百拾四文

右者元禄十五酒造御運上度々上納五右衛門直請取^二付、被加押切皆濟之所、仍如件

元禄十一年寅八月

荒尾新助 印

小鹿野町酒屋

四郎兵衛

史料十五

(元禄十二年八月 酒造御運覺)

覺

一、酒造米拾四石

寅之改石高

此上ケ酒拾六石八斗

但米一石^二酒一石^二式斗乘り

代銀壹貫貳百六拾目

但酒壹斗^二付平均銀七匁五分

御運上銀六百三拾目

但五割掛ケ

此永拾貫五百文

外永拾八文

歩銀

永合拾貫五百拾七文^二

右者去寅之酒造御運上段々上納、此度小手形を以勘定仕上候所、五右衛門直請取^二付被加押切皆濟状、仍如件

元禄十二年卯八月

戸倉廣右衛門 印

秩父郡上小鹿野町

弥五左衛門

史料十六

(安永七年十二月 上小鹿野村名主跡役につき願書)

乍恐以書付奉願上候

一、武州秩父郡上小鹿野村元勘左衛門組百姓百老人惣代久右衛門・藤七奉申上候ハ、当跡名主勘左衛門儀去酉六月中病死仕候処、跡名主役相極り不申^二物角差支候儀御座候^二付、跡名主役相極申度及相談候得共、主頭之者無^二付寄合等相触候^二而^二是又打寄不申諸相談不相決候^二付、無摠私共百老人は同村四郎右衛門身元^二宜敷実体成もの^二而^二御座候間、名主役相頼度申聞候所、得心不仕候得共、勘左衛門儀代々名主役^二相勤候者にて、當時右跡断絶同様^二相成罷有候得共、右跡式相統人相極り候上は、四郎右衛門為^二由緒有之者^二而^二御座候間、右跡相極り次第名主役勘左衛門跡ハ、差戻^二候様引合^二而、則四郎右衛門之趣私共方之^二一札取引此上御役所御聞濟有之候上は、相極可申旨申之候^二付、則別紙連判を以名主役奉願上候、然処同組之内残百姓五拾五人私共方へ^二限て不打合と申儀も無御座候得共、兎角区々^二前書申上候通り主頭之者無之^二付、相決不申組内一列不仕候^二付、私共斗名主役見立別紙之通り奉願上候儀^二御座候、然上は相残候者共私一同四郎右衛門を名主^二相頼候共、又ハ相組名主へ相頼候共、私共方之聊御頼之筋申上間敷候、然共一組之内五拾五人相洩候願^二付、御聞濟難被遊儀^二御座候^二ハ、銘々御呼出之儀^二如何^二奉存候間、右之内仁右衛門・治助・忠藏・善右衛門・富右衛門五人之者共利解^二相分り候もの^二御座候間、被召出御吟味之上何卒御慈悲を以何連^二名主役相決候様被仰付被下置候^二ハ、此上諸相談等無差支市場之儀^二候得^二ハ、火元吟味其外相治り安氣仕難有奉存候、以上

安永七年戌十二月

武州秩父郡上小鹿野村

百姓百老人惣代

久右衛門

藤 七

前沢藤重郎様

御役所

史料十七

〔天明七年九月 煙草市取立につき議定とりかわし証文〕

為取替申規定証文之事

近年拙者致世語多葉粉市取立候処、拙者方内々不手廻り一付、貴殿方御引請市御立被下候様、此度及相談御互、熟談承知之上は、貴殿方御斗と被下、市繁昌いたし候様頼入候、尤名前之儀は諸事連名取斗と可申候

一、帳面売高口銭之内、御差入之金子利分諸懸り諸雜用等引去り、残口銭高内拾歩之内式歩、我等方被遣候苦相極候、尤當日荷物捌方に応、口銭之過不及可有之候間、諸事当日限り之勘定可致候事

一、右市一件に付、何事不寄異変之儀も出来いたし候は、表向之名前御連名にて取斗と万事一存之取斗と致間敷候

一、右市之儀此末拙者手廻り候、我等方も市立申度節は、隔年相立、其節相互熟談を以宜キ方相隨ヒ累年市繁昌いたし候様取斗と可申候、且亦此末我等方は手廻り不申候とも、外々之儀致荷届不及御相談市相立申間敷候、尤右一件に付相互睦敷いたしかさつ間敷儀取斗と申間敷候事

右之通相定候上は少相違無御座候、為後日義定為取替証文、仍如件
天明七年未九月

四郎右衛門殿

弥市右衛門 印

史料十八

〔文化十三年七月 上小鹿野村田畑永荒場所書上帳〕

(表紙)

文化十三年
合 田畑永荒場所書上帳 下書
七月 武州秩父郡上小鹿野村

覚

一、高六百式拾壹石四斗壹升七合
武州秩父郡上小鹿野村

内五拾式石八斗壹升 上水永高
内五分通り程上水永荒

内

高式百廿式石壹斗五升七合

廿八町九反四畝拾六歩

田方

高式石三斗六升三合

年々御引

内式反九畝六歩

高式百拾九石七斗九升四合

残廿八町六反五畝拾歩

永荒

内拾八町程

凡内

上田拾丁程

中田式丁程

下田六町程

高三百四拾六石四斗五升

畑方

九拾五町壹反式畝拾八歩

高六斗六升九合

内巻反八畝拾三歩

年々御引

高三百四拾五石七斗八升卷合

残九拾四町九反四畝五歩

内五拾町程

永荒

上々畑四丁程

上畑七丁程

凡内 中畑八丁程

下畑廿七丁程

下々畑四丁程

荒所字覚

字

道うへ

すわのわき

子の神

らんとう

すわのまえ

あらい

たうのそり

こしの根

宮のまえ

あら屋敷

こぞり

下り

別所まえ

森下タ

山の神

桐の窪

鍛冶屋まへ

くほ

いし田

井戸じり

せうふ井戸

並木

大がうや

別所

早道場

山きわ

堤のうへ

三反田

そり

高田

五反田

くるみ

嶋田峠

八反田

大久保

野竹

八反田

しやうあんじ

竹のつま

石井戸

大久保まえ

ぜん棚

三反田

子の神

いし田

ざるかや戸

籠せき

細田

深まち

五反田

下も田

大縄そえ

たうの前

右之通り西へ東之方江降り大荒ニ御座候

字

忠太屋敷

いも岡

桜畑

久保地

田ばた 半分大荒

合の田

鷹田 半分

黒なし 同断

右之通り荒少々薄々相見江申候

字

黒なし 半分

鷹田 半分

中林

上ヶ土

酒田

五郎次田

右之通り田方少々除^(ついで)無難ニ相見申候

此外無難之畑方字書記シ不申上候

前書田畑永荒場所別紙絵図面之通、荒増相認奉差上候所、相違無御座候、此節ニ罷成候而者、先達而御届申上候節ハ諸作共草生追々立直申候、尚亦小前之者共江精々申聞手入等無油断被為相勤出精仕、御引方等奉願上間敷候、御吟味ニ付田畑荒所町歩荒増奉書上候所、此上共御憐憫之程偏奉願上候、以上

文化十三年七月

武州秩父郡 上小鹿野村 名主 七郎兵衛 印

同 嘉右衛門 印

与頭 伊兵衛 印

重右衛門 印

勇之助 印

伝右衛門 印

万之丞 印

百姓代 太郎右衛門 印

川崎平右衛門様
御役所

史料十九

〔文政四年 小鹿野町市場議定〕

為取替三町内市場議定之事

一、當町市場之儀、慶長四亥年中より取立、毎月五日十日十五日廿日廿五日
晦日卷ヶ月二六度づつ市立來候處、其以後三拾七ヶ年相過、寛永拾二亥年
二月中、御役人中様足五郎兵様・齋三郎右様、右御兩人御越被遊、市場三ヶ
所二相定、絹紙太物穀物鑄物師塩あい物薪くだ物、万之賣買人見世宿右物
附送り人等迄御定被下、当日市場之外二而ハ人馬共二老人も宿仲間數候、若
シ此定違乱仕候ものをハ田地屋敷御取上ヶ、所ヲ御以可被成旨書付連判仕
奉差上置候處、其以後追々町内繁榮致し、市商人多分二相成、御定之市場
二而ハ場狭二相成、自然先義定相破れ市見せ商人銘々勝手佩二相成、上中下
之無元別根に相成、別而近年下町市場皆潰二相成候付、此度三町内一同
相談之上、古來之通三ヶ所二相改候上ハ以來當日市場之外二而ハ三町内一
同前々之通商人一人も差置申間數候、別而極月市之儀ハ格外之義二付、市
場所相延し定杭建置、永々相用諸商人差支無之様に仕、三ヶ所共甲乙無之様
申合、前々市場御定メ被下置候形不相破様可仕候、万二右義定相破り市場
之外二商人差置候狀又ハ隠売等いたし候もの有之ハ、其品其所に預ヶ置可

致出訴候、依之前書之通取極義定連判、仍如件

文政四巳年

下町

中町

上町

史料二十

〔年不詳 屋敷地讓渡出入につき返答書〕

下吉田村

庄藏申口

一、私親類下吉田村源八所持仕上小鹿野村之屋敷四畝六分之儀、去十一月
源八病死仕娘幼歳二而御座候、然所右之儀者源八存生之内、上小鹿野村半兵衛
衛二讓り渡シ候筈、私方江相談仕置候付、源八死後親類共寄合半兵衛
方江讓り渡シ候積り相談仕、右之趣上小鹿野村名主勘左衛門方江証文下書
見七申候所、則勘左衛門自筆二名主書入相渡シ候付、本証文相認半兵衛
方江相渡シ積り仕候所、右陣屋之儀勘左衛門元屋敷有之間、買戻シ度旨訴
状を以御願申上候付、被召出御尋二御座候は、源八存生之内右屋敷半兵衛
衛方ハ讓渡シ候積り、私方ハ申聞候由申上候得共、儘成証拠書物等二而後
有之哉、口上二而ハ難取用旨被仰聞候

此段右屋敷之儀明店二而有之付、屋守附置候儀も不用二御座候間、小鹿
野村仁左衛門・半兵衛者先祖ヨリ懇意付、右兩人之内ハ讓り渡シ可申旨
私方ハ申聞候、然所、去十一月中原八儀御当地二罷出逗留仕候内病死仕候
二付キ、親類共相談之上右屋敷半兵衛方ハ讓り渡シ候積り仕、名主勘左衛
門方江其段申聞讓り証文下書認給候様二申候得者、此節御年貢金取立故無
手違候間、下書認見七候様勘左衛門申候付、則下書仕勘左衛門二見七申
候所、文言等可然旨申候付、左様御座候ハ本紙致候間、其元手跡二而
名前書入給候様申候得者、則勘左衛門自筆二而屋敷名主勘左衛門と書入申候
二付、本証文相認勘左衛門印形取可申と存候所、御年貢為御上納勘左衛門御

役所江罷出申候、然所右屋敷勘左衛門方、買取度段申候付、先達而半兵衛方へ相極候、間難成之旨返答仕儀、御座右屋敷譲り渡候源八存生之内私江申聞候迄、而書物証拠等者無御座候、源八御当地、而相煩罷有候内、下代藤兵衛方分彦三・庄右衛門と申両人之下代方江遣候手紙、去十一月廿四日親類共ニ為相見候所、半兵衛方江同廿八日讓り渡シ可申旨申渡候、其外何ニも証拠等者無御座候

右之通り少茂相違不申上候、以上

戊二月二日 下吉田村 庄藏 印

大屋李之助様

御役所

山中家文書（大滝村中津川山中梅次氏所藏）

史料二十一

〔天明二年 商売仕入金につき一札〕

一札之事

私儀貴殿方仕入金を以て数年来商仕候処、右仕入残金百兩余有之候得共返金差滞当又此節御催促を請迷惑至極仕、依之無拠商先売掛帳、證文貸等迄貴殿江引渡御取立被下候様相願候得者、御得心之上右帳面を以前前人江貴殿引合候間、何様ニも先達之仕入金御引当ニ被成可被下候、尤御取立之上私方否申間敷候、為後日引渡證文、仍如件

天明式年

寅 五月

松平若狭守御預所

信州佐久郡御所平村

本人 文 藏 印

組頭 平 兵 衛 印

名主 嘉 兵 衛 印

武州秩父郡中津川村

松四郎殿

差上申濟口證文之事

前沢藤十郎当分御預り所武州秩父郡中津川村百姓彦市代梓松四郎奉申上候、松平若狭守様御預所信州佐久郡秋山村彦左衛門外百六拾七人、證人六人之者共相手取、貸金引請金滯出入濟方御訴訟奉申上当月廿一日御差日御高判頂戴銘々相附候所、右滞金高百三兩式分・錢百拾九貫式百拾老文・甲金四兩壹分・銀廿式匁壹分・利金九兩式分式宋・錢貳貫百文之処、金六拾兩下錢五拾貫文・甲金三兩請取、殘金四拾三兩式分・錢六拾九貫式百拾老文・甲金壹兩壹分・銀廿式匁壹分・利金九兩式分式宋・錢貳貫百文、私方ニ不足仕不殘内濟仕、偏御威光難有仕合ニ奉存候、然上者右一件ニ付重御願ケ間敷儀決而申上間敷候、仍而為後證濟口證文奉差上候、以上

天明式年寅十一月

前沢藤十郎御預所

武州秩父郡中津川村

百姓彦市代梓

訴訟人 松四郎 印

親類 市郎兵衛代印

松平若狭守御預所

信州佐久郡御所平村

讀人 文 藏

御奉行所様

史料二十二

〔寛政二年 中津川村銀鉛山稼入用取決めにつき一札〕

為取替申一札之事

一、当戊年我等切替之場所ニ而銀鉛ニ及可相成哉之山色見立候ニ付先達而御願差出候、弥願通百五拾日之間問掘願御下知御座候上ハ願人ニ付御日限中ハ我等勝手ニ相稼候筈、御日限切候後ハ村中高之場所ニ付対談ヲ以御願差出并地代等惣村中江割合候筈、勿論先願中も惣高之場所ニ付小屋炭・

薪・留木代金等仕来之通惣村中^江無甲乙割合候筈^二而此末老人立御願差出申間敷候、且又地代等之儀も少なくとも領分^二差出相稼申度可申者有之節者相談^ヲ以何方^江成とも讓渡候筈申合候

右段々申合候通少違乱申間敷候、依之為後證取引一札、如件

寛政二戊年八月

山色見立人 松 四郎

右松四郎此度右御用^二付出府致候間引請人悴

市 三郎 印

松四郎弟 久 四郎 印

同人親 彦 市 印

喜兵衛殿

嘉兵衛殿

惣 村 中

組 頭 市郎兵衛殿

百 姓 半右衛門殿

史料二十三

(文化十年五月 山稼荷物搬出路につき内濟濟口證文)

差上申濟口證文之事

武州秩父郡中津川村百姓佐右衛門^〇同村名主繁八相手取、山稼渡世荷物被差留候出入申立、去申九月中田口五郎左衛門様御役所^江訴上候処、御引渡^二相成当時当御役所様御吟味中^二御座候処、扱人立入掛合之上熟談内濟仕候趣意左^二奉申上候

一、右出入双方得与承札候処、訴訟方申立候者中津川村山内挽板・笹板・羽子板・桶木・木地椀・木地挽物・鞘木・岩茸右八品稼方之儀者、享保十八丑年萩原源八郎様御支配所之節御免許被成下、其後前沢藤十郎様御支配所之節天明六午年挽板・折敷板・鞘木・下駄木・棒木・鳥糞右六品稼増方被仰付右諸品出道御定メ有之候処、佐右衛門^ハ小前百姓之儀^二付、御定書馳与不相弁、

(一一)

糺之儀者木品与違候儀与相心得、最寄宜敷運送手安^而任七、心得違^ヲ以河原沢村^江(七貫目入廿式樽)差出候処、相手繁八右荷物差押御免諸品之儀、新大滝村・白井差右両道之外^江差出申間敷旨御林附之村方^二而御定書も有之候処、新道伐開糺荷物差出候段申立候得共、新道与申筋^二も無之、右糺稼仕出候字亦岩山統^二両神明神与号、薄・白井差両村鎮守之古社御座候^二付、參詣之道筋有之候処、枯木^ヲ以岩角等^江棧等致荷物背負出候儀^二付、新規道筋与相手方相心得候儀^二而右荷物之儀者村方^江引戻^シ御定之道筋白井差^并新大瀧村両道^江差出候筈、右出入之儀者全体繁八^〇御訴可申上存居候処、佐右衛門逆訴致候段旁々難心得旨、繁八申之候得共扱人^ヲ以繁八方^江相詫候得者憤相晴、右道筋之儀者重^而荷物差出不申、以来其他村^江荷出致候儀^ハ勿論他村之ものと馴合山稼等仕間敷、急度御定書之通相守猥り^一稼不仕、荷出^シ勝手之取斗不致筈、其外双方申争候儀者扱人貰受熟談内濟仕、偏^ニ御威光与難有仕合^一奉存候、然^ル上者右一件^二付重^而御願^ケ間敷儀申出間敷候、為後證濟口證文差上申処、仍如件

文化十酉年五月

武州秩父郡中津川村

訴訟人 百姓 佐右衛門 印

相 手 名主 繁 八 印

引合人 名主喜兵衛悴

藤 右衛門 印

同州同郡上名栗村

扱人 勝 三郎 印

南川村

伝 兵 衛 印

古橋隼人様

元御役所

史料二十四

〔文政四年六月 小神流川谷銀鉛山採掘繼續願書〕

乍恐以書付奉願上候

一、當御代官所武州秩父郡中津川村百姓佐右衛門奉申上候、私持地所字小神奈川谷銀鉛山開掘之儀、先達^而奉願上候処願之蒙承御下知、当三月二日分同六月十三日迄、日数百日之間堀浚普請仕候処、鉛氣相顯銀含^成可有之見込御座候^二付、猶亦此度冥加永^貫百文御上納仕再問掘^三奉願上候間、何卒以御慈悲右願之通御聞濟被成下置候^ハ、難有仕合^ニ奉存候、以上
文政四巳年六月

武州秩父郡中津川村

右願人 佐右衛門

川崎平右衛門様

御役所

前書願之通被仰付被成下置候得者村方潤氣^ニ成相成可申候、一同難有仕合^ニ奉存候、以上

巳六月

右村名主 所左衛門 印

与頭 伊三郎 印

史料二十五

〔文政十一年九月 小神流川谷銀鉛山採掘請負につき議定証文〕

為取替議定証文之事

一、字小神流川谷六助沢 銀鉛山 老ヶ所

本行

右之場所銀鉛之含有之^二付御宝山^ニ御取立被成度、年來御心配被成候処、自力行届兼、此度我等^江金主御頼候^ニ付、則右山所引請山方問掘可仕段取

極候処実正^ニ御座候、然^ル上者左之議定堅相守往々盛山^ニ相成候様出精可仕候

一、歩合之事、出金^一不拘山之高拾分^一、其時々急度相渡可申事

一、御公儀様御法度之儀者不及申、山方猥無之様心附可申事

一、右山冥加永^并御願向諸入用等之儀、其内貴殿雜用一日銀四匁ツ、其時々相賄可申事

一、右山稼中、諸職人大勢雇入候節、村方衆^江入交混雜不致不行跡^并無之様可仕候、且山林野畑無謂不荒様^并火の用心大切^一相慎可申事

一、山内出物之儀、我等方^江引請、御公儀様^江御伺之上夫々取捌可申候少^及一己之内捌仕間敷候事

一、右山稼中、炭・薪其外山内入用之品々、其時々相当之代金差出、少^成猥不成様可仕候事

右之通り議定取極候上者永久無違變陸敷相稼可申候、依之為後証加印一札入置申候、仍如件

文政十一年

九月十八日

上州邑楽郡梅原村

金主 直 七 印

同州同郡三林村

立会加印 長 兵 衛 印

武州秩父郡中津川村

立会 喜 兵 衛 印

武州秩父郡中津川村

山主 茂市殿

史料二十六

〔弘化四年二月 小神流川谷鉛山稼人取締りの儀につき請書〕

差上申御請書之事

私共村内字小神流川谷之内飛ら平^并六助沢、字赤岩谷之内狩懸ヶ沢鉛山之儀、御当地品川町裏河岸家持平作・通油町家持平兵衛・野州佐野天明町理右衛門儀、村方^并先稼人喜兵衛^江及対談、一同無故障夫々議定書為取替セ等いたし稼方之儀奉願候。付御取調御伺之上場所引渡相成月分中五ヶ年季、稼方請負被仰付候段今般御下知之趣、平作外式人^江被仰渡候間、得其意御運上金之儀者三人之もの今直納いたし、出給者勝手勘込年違作之年柄^而も御年貢米拝借等も不相願都^而自分入用ヲ以相稼候筈、且稼中者堀職之もの共多人数入込候儀。付時々御出役之上御取締可被成下候得共、山元猥之儀無之様村役人共見廻り取締心附、稼方之もの共村方^江対^レ不正筋者不及申自然不作法之儀有之候^ハ、不隱置可申上、仍^而者村役人者勿論小前末々之もの共、稼人共^江対^レ私曲不正之儀仕向、又者作分義申掛、金銀米錢等ねたり取、或者無筋之事^ハ御吟味之上急度可被仰付候間、右体之義決^而無万端正路取斗候様村中小前末々之もの共^江不洩様申渡、取締方嚴重^可取斗旨被仰渡之趣逸々承知奉畏候、仍^而御請証文差上申処、如件

弘化四年二月十三日

当御代官所

武州秩父郡中津川村

役人惣代 名主 所左衛門

与頭 金左衛門

小前惣代 百姓 倉次郎

林部善太左衛門

御役所

(案文)

史料二十七

〔嘉永五年十月 鉛山村方人足差し止め出入につき願書〕

乍恐以書付奉願上候

武州秩父郡中津川村小前・村役人惣代、組頭金左衛門外式人奉申上候、先般私共一同惣代右金左衛門外式人より当村名主所左衛門^江相掛、不法出入訴上、来^ル十一月朔日御差日之御裏書頂戴相附候処、当月六日同人代之由親喜兵衛義、村御預ヶ之身分を不願鉛山稼人久之助・野州佐野天明町百姓利右衛門者字小倉沢本稼、御当地品川裏川岸平作者字道窪間堀稼其余古敷茂登婦捨がらみ等相稼罷在候所、右小屋場狩掛沢外式ヶ所^江罷越、詰合候稼人亦者召仕之もの^江申談候者此節村内小前分所左衛門相手取御裏書頂戴仕候付、右出入中者村方人足差者為相稼難申候間稼人共おみて茂村方人足之分者差控候様いたし度、尤寿々竹・焼木・薪等者同人方^而無差支様取斗ひ候旨、夫々敵敷相断鉛稼^ハ付罷出居候村方人足者不殘引下ヶ、難洪為仕驚入候義^ハ有之、村方人足稼方之義者女子供者寿々竹^与唱ひ鋪内^而相用候品を日々稼人共^江売渡、一体焼木薪等者兼^而稼人^江為任置候場所^而伐出、右賃錢等申請罷在候義^ハ有之、元来当村者極山中耕作甚手薄^ハ付、八色稼与唱山稼之外何^而茂余業無之難洪之場所^ハ付、右体被差妨候^而者一同及謁命候仕合、且稼人共方^而八所左衛門分無差支様可仕旨^ハ候得共村方人足を不相雇候^而者鉛稼差支^ハ相成候^ハ付不法之段御訴奉申上候旨^而喜兵衛相詰合候始末書取、小屋場詰之もの共鉛々差出候義^ハ有之、於私共前出入御差日中^ハ付、今般之始末御訴奉申上候義奉恐入候得共、大勢之もの余業^ハ相難難洪仕候間、無是悲此段御訴奉申上候、何卒以御慈悲所左衛門被召出右体御吟味之上勝手俣之妨不仕、小前一同無難余業罷成候様被仰付被成下置度奉願上候、以上

嘉永五年十月

当御代官所

武州秩父郡中津川村

小前惣代 百姓

嘉兵衛

佐右衛門

村役人惣代

与頭

金左衛門

御役所

相札義有之間、来ル廿五日可能出、若於不參者可為越度もの也

子十月七日

武州秩父郡中津川村

林部善太左衛門

名主 所左衛門

役所

右 与頭

乍恐以書付奉願上候

武州秩父郡中津川村役人惣代、与頭金左衛門・小前惣代百姓佐右衛門煩付代兼嘉兵衛奉申上候、今般私共々名主所左衛門江相掛不法之御成方有之段、訴上候処同人江御差紙頂戴仕、私共義茂差控罷在候処、前書佐右衛門義、持病之積氣差発種々薬用仕候得共、快方趣兼難渋罷在候間、於村方兼而薬用為仕度同人江御尋之義者、私共之内嘉兵衛引受無御差支様仕候間、何卒以御慈悲佐右衛門帰村被仰付度奉願上、以上

嘉永五子年十月廿三日

武州秩父郡中津川村

役人惣代

与頭 金左衛門

小前惣代

嘉兵衛

嘉兵衛

林部善太左衛門様

御役所

(案文)

史料二十八

(嘉永六年十月 鉛砂採取につき取決め一札)

入置申一札之事

一、中津川村持字赤岩谷之内狩懸沢、字小神流川谷之内六助沢・比良平右三ヶ山鉛山稼中川々今流出し居候土砂多分有之、右土砂少々者鉛氣御座候様依而者小神流川・赤岩川落合ヶ川下之義者御対談為取替、絵図面書付之通り返山場所二付村方持二相成居候処、且今般当村鎮守諏訪大明神本社并拝殿鳥居再建修覆いたし候処多分諸人用相懸候二付、前書三ヶ山鉛山御会所江御無心申入厚キ御寄附奉納被成下忝存候得共不足金有之、依而者今般我等村内一同及相談候処、流出し居候土砂鉛賣殿方江相任七候処聊相違無御座候、就而者御勝手次第第二職人相雇入御稼取被成候与も右両谷落合ヶ川下相任七金式両榎二受取申処実正也、尤稼中小屋掛ヶ人用之諸木共御勝手之場所二而御伐取被成候筈、若万一稼中村方者勿論脇合々彼是故障族等出来いたし候節者、連印のもの一同何方迄も罷出、急度埒明、一日たりとも稼方之御差支無之様取斗ひ可申候、後日聊御心配御苦勞相懸申間敷筈二而連印之一札差入申処、仍而如件

嘉永六丑年十月

中津川村

伊之助

元吉

主馬次郎

半兵衛

茂三郎

十右衛門

長吉

伊八 嘉兵衛代印

十兵衛

倉吉

熊吉

儀左衛門

勘吉

久左衛門

仙之助

佐右衛門

惣十郎

喜右衛門

嘉兵衛

勇吉

金左衛門

金左衛門代印

惣吉

狩懸沢

御会所様

前書之通り村方対談行届印形取揃候上者、狩懸沢御会所詰市十郎殿^江相任七及対談候処右土砂^二鉛氣有之稼方^二取掛り、引合利徳儲^二相成候節者我等共仲間連中之もの^江者右村方対談行届候、世話為謝礼乗合稼^二いたし、歩合夫々御差加被成等之御極対談堅取極置申候、聊相違無御座候、尤金主元之儀者市十郎殿^ハ相賄候筈、且利徳金配分之節者相互^立立合、依手勝手之取斗ひ者不致相談之上陸敷配当仕候筈、仲間為取替議定いたし置候処、為後日奥書印形仕置候、以上

丑十月

金左衛門 印

惣十郎 印

佐右衛門 印

久左衛門 印

嘉兵衛 印

前書之通り為取替置候得共、私共儀者数日日間相掛り骨折等もいたし候^二付、且村内^二儀左衛門・市次郎少々心組有之趣^二漸向有之候^二付、弥稼方^二取掛り利徳^二相成候節者、少^シ成共仲間相談を以聊^二茂配分いたし遣し候筈^二猶又奥書^江為念記置申候、以上

金剛院文書（両神村簿 薄平寿徳氏所蔵）

史料二十九

〔天保十三年二月 永代講中帳〕

（表紙）

永代講中帳 全

抑八日見山ハ東方の鎮護武陽第一の靈蹤也、往古日本武尊東征の載此嶽を望^ミ峨々たる山勢恰も勇士の怒立するが如しと大ニ感悦まし^ク、賊徒降伏のため伊弉諾・伊弉冊の二尊を遙拝し、群凶退治の後必らず當地^二神廟を移し奉らんと誓^ハせ玉ひ、幾程なく夷類平定により、御身づから藤蘿を捫

り巖壁を踰り絶頂^二淨地を卜して御悅の奉幣捧げ玉ひ四面を回覽在すに、群山児の如く環り芙蓉客の如く峙^テ、凡行程八箇日の眺望を餘^セり、故^ニ初て八日見山と詔あり、^二神の靈殿を両神宮と尊号し国家安寧武運長久を祈らせ玉ひしより、今に連々綿々として參詣の踵間断なく神徳の光日に新に月に盛也、就中奥の院大権現は本地の誓約殊^ニ麗しく、火盜水災を攘ひ厄難病苦を破除し五穀豊饒養蚕倍盛を守り、普く万民快樂のため両部曜を普^ク神仏徳を合^セて日月の代ル^ク照し、雨露の送^ニ滋潤が如し、仰ぐとして御陰に覆^ハぬ^ハなく祈るとして利生蒙らざるはなし、夫神明ハ信心の袖に光を移し仏陀ハ渴仰の掌^ニ響^ク応ず、実^ニ龍の雲を起し寅の風を生ずるが如し、爰^ニ予が師順明法印行法功^ツミて深く神慮に叶ひ精神潔^クして厚^ク仏心^ニ会^ヘり、往寛政辰の冬不測の靈夢を蒙り、やがて山頂^ニ攀^リ只願祠前^ニ跪^テ飛霜の肌を憫らすを知らず、氷雪の皮肉を撃くを覺ず、肝胆を絞り骨髓を碎きて臘より春^ニ亘り百日の住山を誓ひ、一千座の護摩供を行し長く神意を清しめ奉りしより、靈験増々掲^テ感応殊^ニ顯然たり、依て常年四月初八日九月中九日修法勤行怠り無かりしに、去天保西春三月正念^ニ寂を示せり、是に於て遺弟寛明自ら淺層を願ず、師の跡を追い志を継ぎて勤行形の如く怠らず、四方の講徒を誘ひ東西の參詣を授て普^ク神徳^ニ浴し無量の福寿を得しめんとす、よりにて此頃又一^ニ大願を發起し、師の遺壇を復し再^ニ千座を執行し永代法燈をかか^テて遠近信仰の門を照し、猶神徳の天地^ニ亘り靈験を億兆に被しめんを願、然りと雖方外の身貯ふる財なく行中資糧乏^クして修し遂るを能^ハざるをいかんがせん、庶幾^ク有信の君子貧道が蠱測の志を憐^ミ、多少の囊財を抛擲し力を助け欠たるを補ひ玉^ハ、修福何ぞ他に及^ハん、僉是施主の門に充滿し開運満足如意吉祥子孫繁榮の基とならんを豈敢て疑ふべけんや、豈敢て疑ふべけんや

天保十三年辛丑春二月

八日見山奥院別當

役沙門

金剛院 印

寛明

今般金剛院遺弟寬明於八日見山奧院広前一千座護摩供執行大頭發起致候間各様方御寄進之程奉希し候、以上

丑二月

名主 勘 解 由 印
組頭 四郎右衛門 印

護摩供一座

一、金百疋

右四ヶ年^二御神納被下度尤一座御一人^〇御四人限り御組可被下候御札ハ御銘々^江致進上候、以上

史料三十

〔明治二年 普寛行者遣法壳薬検査願書〕

以書付奉願上候

第一大区四小区佐柄木町二番地新谷長右衛門同居寄留薄平寿光言上候、私先祖御嶽山開關普寛行者之遣法是迄人望^二因^而壳薬致居候処、今般於文部省壳薬類薬味用方御検査御布告奉拝承、則別紙之通薬味用方効能書認メ製剤相添右御省^江奉願上度候間、何卒以御検査是迄之通り右壳薬方御許可相成候様、御添翰被成下置度此段奉願上候、以上

本籍

熊谷県管下

武蔵国秩父郡

南第拾壹大区二小区

薄村

第三大九拾番地平民

御府下

第一大区四小区

佐柄木町

第二番地

東京府知事

大久保一翁殿

御嶽山開關普寛行者遣方

一、百草製錠

藥方

一、阿仙薬 十五匁

一、木香 十匁

一、胡黄連 五匁

一、大益智 五匁

一、甘草 一匁五分

一、黒焼黄栢 八匁

一、麝香 一分

一、百草霜 四匁

合八味細末葛^二而錠數五十枚^三製ス但価銀一匁二分

用方小兒ハ十分ノ一大人ハ十分ノ四ヨリ十分ノ五ニ至リ白湯^二而飲下ス

合八味細末葛^二而錠數五十枚^三製 壳価一錠銀一匁二分

原価通計銀二十五匁九分三厘

前書之通薬方調製從往古人望^因而壳薬致し来候^二付、尚此上普壳薬方懇精仕度則製劑添奉願上候間、何卒御検査之上御免許被成、候置度此段奉願候、以上

文部省御中

平民 新谷長九衛門同居
寄留

平民 薄平寿光

効能

氣つけ

むし

しゃく

元価銀老匁一分三厘

価銀二匁

価銀一匁八分

価銀五分

価銀一匁九分

元価 四分

元価銀十八匁

元価銀二分

觀藏院文書（兩神村役場寄託）
史料三十一

〔八日見山兩神宮略縁起〕

（表紙）

武州秩父郡薄邑

八日見山兩神宮略縁起

八日見山略縁起

抑兩神宮の来由を奉尋に、天地開闢の尊神國常立尊より七代の御神伊弉諾・伊弉冊の兩神常陸國筑波山に御降臨御座して夫婦の道始れり、天照太神降誕ありて地神五代をへて、仁王第一癸酉元年神武天皇天津日嗣を受させ給ひてより代々寶祚萬々歳、同六十九代御朱雀院御宇長曆三己卯年孟夏の初め一位道人といへる人筑波山に參籠ありて再拝しけるに、頻りに睡眠を催しけるに、びんつら結たる童子夢中に出現して、汝天地自然の思厚なることを深く信敬して父母親族諸事^二至迄深志なるを汝が常なり、今世を遁て心の儘なるべし、是より坤の方に當り七十繩引を過す兩神の舊山あり、爰に神靈を勧請なして永々天下泰平四海靜謐の靈山となすべし、其時案内として白狼出べし、是にしたかつて其山を開べし、夢々うたかふことなかれと、見し夢覺て奇異の思ひをなし再拝し靈夢の告にまかせ、夫より未申の方を心掛武州秩父郡薄邑^二来り、遠山を見渡に雲霧覆ひ峩となる山を見當に行程に思^ハすも、靈夢のことく白狼出て先に立是にしたかひ三里餘り峻岨なる岩尖に登り付、南方に、深々たる幽谷を過、今髭摺岩と称す此所漸くよち登り峯に至り平地あり、いかにも深々として安居の地なりとよろこび兩神宮を勧請なし、則兩神山と称す、翌年改元ありて長久元庚辰年四月に至り、道人思ふ様靈夢を蒙りしより尋來ること日数八日にして見當し故八日見山と号す、則兩神宮の邊に居住せり、今に寺屋敷と称し平地有り御宮前脇に眷屬の祠有り白狼をもつ

て眷屬とす、仍て諸人に火防盜賊除の眷屬^ハ、當山今出す、毎歳四月八日より諸人參詣あり、神事無怠事依て往古今火除盜賊疫病除御守札出し来れり、信心の輩如意満足無疑もの也、委敷^ハ本縁起記畢

○祭禮 ○四月八日九日 ○同九月九日

○縁日 ○毎月十九日 ○眷屬祭毎月十有八日

武州秩父郡 八日見山籠薄邑

別當 觀藏院 印

現住再板之

